



Title	《フィジーニの家》とその時代をめぐる考察：ここではない何処かへ
Author(s)	平井, 直子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49094
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	平井直子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第21701号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	《フィジーニの家》とその時代をめぐる考察—ここではない何処かへ—
論文審査委員	(主査) 教授 藤田 治彦 (副査) 教授 上倉 庸敬 龍谷大学教授 大橋 良介

論文内容の要旨

本論文は、建築作品《フィジーニの家》(la villa di Figini、ミラノ)について、学位申請者がこの建築物を観た際の感覚「ここではない何処かへ」を出発点とし、イタリアの1920年代から30年代にかけての建築全般のみならず、また、イタリアの枠だけにはとどまらず、この時代の建築の本質的な問題にもかかわっているのではないかという問題意識も根底に置きつつ、一方で、この時代のイタリア建築の展開の特殊性と、他方、同時代の近代建築全般についてもいえる普遍的な問題について掘り下げた試論である。

序章で先行研究の確認を行ったあと、第1章で《フィジーニの家》という建築物単体(自体)についてその概要を設計図、写真等に基づき、かつ、ミラノにおける現地調査を踏まえ再確認し、詳細な検討を加えている。分析は形態と言説の両面から行われている。その結果、《フィジーニの家》はミラノに現出した「立体的な抽象絵画」のようなものであった、という見解に至っている。続いて、建築家フィジーニ自身の言説について考察した後に、フィジーニがミラノ工科大学出身の若い建築家たちとともに結成したグルッポ・セッテの思想を分析している。その結果、その合理主義の主張を確認するとともに、「反都市」と「伝統の再生」という、フィジーニおよびグルッポ・セッテを理解するために不可欠の、ふたつのキーワードを導き出している。

「反都市」—ミラノの[場所]の性格、と題された第2章では、ミラノの近代建築の歴史について、新古典主義、ステイーレ・リバティ、未来派、ノヴェチェントの順で、それぞれの概要を確認しながら、関連の考察を行い、ミラノという都市の[場所]の性格という観点から、折衷主義の街に注目している。続いてミラノの都市の歴史を、概説を加えながら分析し、そこにおける《フィジーニの家》とその場所について考察している。

「伝統の再生」と題された第3章は、第1節「イタリア合理主義の時代」および、第2節「インターナショナル・スタイル」との比較に分けられている。ここで注目されているのは、イタリア合理主義における古典回帰の傾向と「伝統」の問題である。

《フィジーニの家》は、ミラノにある特定の伝統的な意味での「場所」の中から生み出された作品ではなく、ミラノという都市における、近代建築ではあるが、古典主義的な作品であり、こうした古典主義的な作品を生み出す背景は、この時代のミラノであったために生じた。《フィジーニの家》における複雑性は、ここに「インターナショナル・スタイル」の建物がそのまま移入されたということもまた、ミラノという都市の、外の文化に開かれているという一側面に起因しているという点である。「場所」から逃れていくような感覚を観者に与えるのは、作品形態およびその

「場所」の特殊性に拠っているのであり、《フィジーニの家》は「場所」に根付かない建築である。しかしながら、時代背景を鑑みれば、逆説的に、この時代のミラノでしか生まれなかった希有な作品として《フィジーニの家》は存在しているといえる、と結論している。

論文審査の結果の要旨

本論文は 1935 年にイタリアの建築家ルイージ・フィジーニによってミラノに建設された《フィジーニの家》に関する近代建築史・建築論的研究である。それを観る者に「ここではない何処かへ」という感覚を与える建築物であると筆者が考える《フィジーニの家》を取り上げることによって、1920 年代から 30 年代にかけてのイタリア建築全般にあてはまるいくつかの事象を分析し、さらには、この時代のいわゆる「インターナショナル・スタイル」の近代建築全般にかかわるより普遍的な問題について、イタリア（ミラノ工科大学）留学と、より広い視野から行った現地調査の成果を踏まえ、その観点から論じている。

《フィジーニの家》は、当時のイタリアではもっとも進歩的な近代建築の住宅として、新たに開発された住宅地域に建設された。但し、近代建築とはいえ、イタリアの「インターナショナル・スタイル」の建築は、多かれ少なかれ、古典主義的な性格を備えている。その住宅地には、その後、伝統的住宅と比べるなら近代的ではあるが、徹底した近代建築と比べるならば折衷主義的な住宅等が建ち並び、先駆的近代建築である《フィジーニの家》は結果的に同地域の他者となる。本論は、以上のようなイタリア建築の特殊性と、前衛的建築（建築家）が志向した世界的普遍性とのあいだで、イタリアの近代建築とミラノという都市、そして《フィジーニの家》を分析し、記述しようとした。

そのために用いられた「立体的な抽象絵画」という概念は、やや既定が曖昧である。「反都市」および「伝統の再生」という対にして用いられた概念の間にはレベルの差も感じられる。しかしながら、上述のような、建築物単体とその周辺との、空間的かつ時間的（歴史的）に推移する関係という複雑な、しかし、建築物が不可避免的に持っている性格に注目して、分析、論述するという独自の試みは重要であり、いくつかの新たな論点を本論文は提起している。よって、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。